

詩篇60篇より

0 指揮者のために。「さとしは、ゆりの花」の調べに合わせて。教えのためのダビデのミクタム。ダビデがアラム・ナハラタイムやアラム・ツォバと戦っていたとき、ヨアブが帰って来て、塩の谷でエドムを一万二千人打ち殺したときに

1 神よ。あなたは私たちが拒み、私たちを破り、怒って、私たちから顔をそむけられました。

2 あなたは地をゆるがせ、それを引き裂かれました。その裂け目を、いやしてください。地がぐらついているのです。

3 あなたは、御民に苦難をなめさせられました。よろめかす酒を、私たちに飲ませられました。

4 あなたは、あなたを恐れる者のために旗を授けられました。それは、弓にかえて、これをひらめかせるためです。セラ

5 あなたの愛する者が助け出されるために、あなたの右の手で救ってください。そして私に答えてください。

6 神は聖所から告げられた。「わたしは、喜び勇んで、シェケムを分割し、スコテの谷を配分しよう。

7 ギルアデはわたしのもの。マナセもわたしのもの。エフライムもまた、わたしの頭のかぶと。ユダはわたしの杖。

8 モアブはわたしの足を洗うたらい。エドムの上に、わたしのはきものを投げつけよう。ペリシテよ。わたしのゆえに大声で叫べ。」

9 だれが私を防備の町に連れて行くでしょう。だれが私をエドムまで導くでしょう。

10 神よ。あなたご自身が私たちを拒まれたのではありませんか。神よ。あなたは、もはや私たちの軍勢とともに、出陣なさらないのですか。

11 どうか、敵から私たちを助けてください。まことに、人の救いはむなしいものです。

12 神によって、私たちは力ある働きをします。神こそ、私たちの敵を踏みつけられる方です。

詩篇 60 篇は、表題の内容からかなり具体的にこの詩が書かれた背景を理解することができます。ダビデ王の絶頂期に、隣接する諸勢力が同盟を結び、寝首を搔くかのごとく攻め込んできたという出来事です。しかも、真正面からではなく、ダビデが総力を挙げて北方の大敵とユーフラテス川付近で激戦を交わしていたさなかに、エドムはその機会を狙って北側から空き状態のユダを襲ったのです。同盟を結んだ南方諸族というのは「モアブ」「エドム」「ペリシテ」のことでしょう（8 節）。以下、南方所属の総称として「エドム」と呼びます。

レベルは異なれど、私たちにも似た状況があるのではないのでしょうか。大きな問題の対処に追われていたら、別のところからもう一つの大きな問題が持ち上がってきて、どっちを向けばよいか分らなくなってしまう。力を分散すれば、両方ともやられてしまうかもしれません。

ダビデには決断が迫られました。彼は將軍ヨアブ（ダビデの甥）を南部へ送り、新興勢力を退けました。死海近辺の塩の谷でエドム軍 12000 人を打ち倒したのです（Ⅱサム 8:3-8, 13, 10:15-19、Ⅰ歴代 18:3-12）。

タイトルを読めば以上のような背景が見えてくるのですが、1 節からは神がイスラエルを拒み、怒り、顔を背けたという悲しい言葉が綴られていきます。これは恐らく、「やられた！もうだめだ。国も家族も失うかもしれない」と蒼白になったときのダビデの心境を振り返っているのでしょう。2 節に出てくる地震のイメージ（地をゆるがせ）は、忘れた頃にやって来る危難、「引き裂かれ」という表現は、当初エドムの攻撃をどうすることもできず、多くの死者が出たことを言い表していると思われます。国民は恐怖に震え、「よろめかず酒」（3 節）で心がフラフラになったような状態にありました。

しかし、4 節を境に、本篇の雰囲気は変わり始めます。この状況下にあっても、救いの御業をなし給う神を信じる言葉が聞こえてくるのです。「旗」を授けられる（4 節）とは、神が味方を召集してくださること。更に、5 節では「あなたの愛する者」という表現を詩人自らが使っていて、自分が根本的に神に拒まれたのではないという力強い信仰を告白しています。

6～8 節には、神の応答のことばの中に様々な地名が出てきますので、解説しておきましょう。

「シェケム」…ヨルダン川西岸の町

「スコテ」…ヨルダン川東岸の町

これらはいずれも「約束の地」の一部で、神の支配下にあることが表現されています。

「ギルアデ」「マナセ」…いずれもヨルダン東方の広い地域で、イスラエルの領土

「エフライム」…イスラエルで最も強い部族であり、ここでは「兜」と呼ばれている

「ユダ」…忠誠なる部族と評され、ダビデ自身も主イエスもこの部族出身。ここでは「杖」と呼ばれている（「兜と杖」とは「防衛と支配」の表現）

これらの地名が一つひとつ挙げられているということは、ダビデはそれらの町々のために遠方から祈ったのでしょう。私事ですが、牧師として生きておりますと、平日に信徒の皆様とお会いできないときに、ふと胸騒ぎがして一人びとりの名前を思い出して祈ることがあります。生活が支えられるように、悪しき者の攻撃から守られるように…と。その心境と似たところがあるように感じました。

さて、8節に登場する南方諸族の名前も見ておきましょう。

「モアブ」…アブラハムの甥ロトの子孫で、古くからイスラエルに敵対してきた民族（民数 22:2-11、Ⅱサム 8:2、Ⅱ列王 13:20）

「エドム」…ヤコブの兄エサウの子孫で、モアブと同様、イスラエルとよく争ってきた民族（民数 24:18、サム上 14:47, 48、サム下 8:13, 14）

「ペリシテ」…ユダの西、地中海沿いの平野に住んでいた民族。ダビデ時代よりもずっと前からイスラエルに敵対してきた

これらの民族について、「モアブはわたしの足を洗うたい」「エドムの上に、わたしのはきものを投げつけよう」「ペリシテよ。わたしのゆえに大声で叫べ」という面白い表現がそれぞれに当てられています。これらの民族は戦いで打ち破られるだろう。そして、召使いとなってイスラエルの足を洗い、履物を揃え、そのお帰りを大きな声で告げるようになるのだ。そんなことが予告されているようです。この祈りは最終的には断言となり、「**神によって、私たちは力ある働きをします。神こそ、私たちの敵を踏みつけられる方です**」と締めくくられます。

私たちの生活の中にも、苦しみに苦しみが加えられるような状況がきっとあるでしょう。災害、病、経済的危機、身内の死、人間関係の破綻…。神の守りが見えなくなるとき、しかし、自分が変わらず「**あなた(神)の愛する者**」（5節）であることを忘れないでいたいのです。この詩篇 60 篇が、これらの危難を乗り越えた人物による詩であることは、何よりの証と言えないでしょうか。